

我はいかにして 途上国学徒となりしか

塩田 光喜

● 第一五話 虫瞰と鳥瞰の交錯 (三) — 米騒動から昭和恐慌へ —

明治一八（一八八五）年生まれの曾祖母コヲは、小学校の唱歌の時間に「同胞すべて四〇〇〇万」と歌った。同じ歌を明治三八（一九〇五）年生まれの祖母キクは「同胞すべて六〇〇〇万」と歌った。

まさか二〇年で人口が五割も増えたとは思えないが、明治時代、日本の人口が驚くべき勢いで増加したことは疑えない。米の生産力が人口増加に追い付かなければ米不足になるのは日を見るより明らかだ。

実際、「明治のうちには米の国内生産力は頭打ちになってきていた。それなのに人口は増える一方。足りなくなつてあたり前だった」挙げ句の果てが一九一八年の米騒動だった。

片山杜秀によれば、米騒動に震撼した時の支配層が考えた対策は、日本統治下にあった朝鮮半島に資本を投下して米を増産させて、日本本土の米不足を賄うというものだった。

「政府が目をつけたのは植民地だった。特に朝鮮である。（中略）朝鮮で安くおいしい米を増産する。そのために政府が大規模投資を行う。成功すれば二度と米騒動は起きないだろう。（中略）国家社会の全体的崩壊は食い止められるはずだ」。

かくて、一九二〇（大正九）年に「朝鮮産米増殖一五年計画」が策定される。

だが、一九二六（昭和二）年に策定された新一二カ年計画は更にグレードアップされたものだった。

「新たな一二カ年計画は、その遙か上を行く。国庫補助が二割で政府資金が七割なのだ。自己資金は一割りで

いい。

よだれの出るほどおいしい話。事業家は朝鮮の農地に争って投資するだろう」。

そして、日本政府の読みどおり、一九三二（昭和六）年の首都圏の米の回り高は「内地米が七八三万俵に対して、なんと朝鮮米は四四五万俵」。

日本の朝鮮農業への資本投資がいかにすさまじく、また効果を挙げたかがヒシヒシと伝わってくる。

この動きをじつと見つけていた男がいた。我が祖父、定助である。

日本の朝鮮への急激な農業投資が米だけで完結するはずがない。当然、換金作物にも及ぶはずだ。特に、キムチを初めとする朝鮮料理に必須のスパイス、唐辛子にも。祖父定助が朝鮮—大阪間の国際スパイス・トレードに乗り出したのは、次男の俊輔（昭和二年生）誕生直後のことだったことはすでに述べた。新一二カ年計画が策定されて一年後のことである。

祖父の動きは素速かった。祖父は新聞を読み。大阪の市場の動きを読んで、果敢にリスクを取りに行ったのだ。菊池英博によれば、「昭和のデフレは一九二五年に始まる」そして、一九二七年には金融恐慌に突入する。

「近代日本鳥瞰」的には、完全に逆風が吹いていた。しかも、大嵐である。だが、「塩田定助虫瞰」的には、潮流に乗って、それまでの託問の仲買商から、朝鮮—大阪間の国際スパイス・トレーダーへの飛翔の日々だった。（しおた みつき／アジア経済研究所 貧困削減・社会開発研究グループ）